

「心の居場所」としての学校図書館のあり方

関森 あすか

近年、学校図書館は、子どものストレスの高まりや、生徒指導上の諸問題への対応の観点から、児童生徒の読書の場としての機能だけではなく、学校図書館自体が児童生徒の「心の居場所」となることが重要視されてきている。そこで、本研究では、「心の居場所」としての学校図書館づくりに対する中学校の学校図書館担当者の意識と現状について聞き取り調査を行い、「心の居場所」としての学校図書館のあり方を考察することを目的とした。

聞き取り調査の質問内容の枠組みを作成するために、文献調査を行った。その結果、学校図書館の「心の居場所」の要素として「落ち着いて過ごせる」ということと、「人々とのかわりを持つ」という2つの視点を抽出し学校図書館担当者の働きかけの視点として、人的側面、物的側面、運営的側面の3つを決定した。

聞き取り調査では、学校図書館担当者を対象に「心の居場所」としての学校図書館づくりに対する意識と現状について聞き取りを行い、分析と考察を行った。その結果、大きく以下の4点が明らかとなった。(1)独自の学校図書館に関する計画が定められていた中学校は1校だけであり、主に学校図書館運営を行う学校司書1人のみで判断をしている場合がほとんどで、他の教職員と学校司書が情報共有をする機会も少ない。(2)多くの学校司書は、学校図書館の「心の居場所」を自由に過ごすことのできる場所として意識しているが、生徒に対して学校図書館の「心の居場所」の役割について伝えていることはほとんどない。(3)生徒の意見や要望を把握する方法は、本のリクエストにとどまっていることが多い。(4)学校司書は、組織体制や規則・計画など、他の教職員と協力をして改善をしていくという意識はあまり持っていない。

これらの結果から、「心の居場所」としての学校図書館づくりは、規則や計画はほとんどなく、生徒の意見や要望の把握は本のリクエストにとどまっていることが多いなど、積極的に行われているとは言い難く、改善すべき点が多いということが明らかとなった。今後特に改善していくべき課題として、(1)規則や計画が定められていないこと (2)学校図書館の「心の居場所」としての利用の周知が不足していること (3)生徒の学校図書館運営への参画が少ないこと (4)他の教職員との連携が弱いこと という4つの点を挙げた。

これらの課題を改善するためには、まず学校図書館担当者は、自校の現状を把握し、どのような学校図書館が生徒にとって「心の居場所」となるかを検討していくことが重要であり、生徒の意見を汲み取ろうとする姿勢が求められる。そして、学校図書館の「心の居場所」の役割や内容を学校図書館運計画の中に明示していくことで、他の教職員との共通認識を形成していくことが必要である。その上で、課題の改善に向けて、教職員と連携をして「心の居場所」としての学校図書館づくりを進めていくことが求められると考える。

(指導教員 平久江祐司)